

精神科デイケア・小規模作業所における 地域精神看護学実習の学び ——実習レポートの分析より——

山田 浩雅, 中戸川早苗, 糟谷久美子, 岩瀬 信夫

Nursing Student Education through Community Psychiatric Nursing Experiences in Psychiatric Day-Care and Social Return Facilities: An Analysis of Practicum Records

Hiromasa Yamada, Sanae Nakatogawa, Kumiko Kasuya, Shinobu Iwase

本研究の目的は、地域精神看護学実習における学生の具体的な学びを明らかにし、学習内容の教育的意義と効果、今後の実習方法について検討することである。研究対象者である学生の実習後レポートを質的に分析したところ、6カテゴリーが抽出された。学生は【医療福祉施設の機能と役割】を具体化し、【障害者のための様々な支援の整備と連携】が行われていることを学んでいた。地域で生活している障害者に対しては、彼らとの関わりのなかから【病気と闘いながらの地域生活】を学び、【多職種による利用者支援】【法制度による利用者支援】を得て生活をしている現実を学んでいた。障害者が暮らしやすい地域づくりとして、【啓発活動の必要性】を挙げることができていた。これらのことから地域精神看護学実習は、障害者の地域生活や医療福祉従事者の役割、精神保健に関する社会資源の活用と法律や制度に基づく支援サービス等幅広く学びを共有し有効な実習であることが示唆された。

キーワード：精神看護学実習，地域精神看護，実習レポート

I. はじめに

精神科患者の入院環境においては、厚生労働省の2005年の患者調査によると精神科病院に入院している患者は約32万人おり、そのうち受け入れ条件が整えば退院可能な患者は約7万6千人とされている。国は2004年から10年間でいわゆる社会的入院とされる7万2千人の退院、社会復帰を図ることを目標として掲げているが、対応に困窮している現状がある。このような状況の中、今後は看護師が退院支援や地域での社会生活支援の場で、どのようなケアを提供するかが課題となってくると考えられ、学生がこのようなことに関心を持ち知識を養っていくことは、今後の精神看護教育にとって重要なことであると考えられる。

“精神看護実習”における先行研究について、1999年から2009年までの10年間で医中誌検索では原著論文が63件であった。そのうち実習前後の学生のイメージ変化について¹⁾⁻³⁾、また患者との接触前後の患者理解について⁴⁾⁵⁾、物理的環境に対する学生の学びに関して⁶⁾⁷⁾、その他看護実習における教育評価⁸⁾⁹⁾、患者理解のための看護過程¹⁰⁾¹¹⁾などが発表されているが、そのうちの多くが精神科病院内での入院患者との関わりや入院病院環境に関する研究であった。つまり精神看護教育が、どちらかという精神科入院医療に重きがおかれ、保健・福祉に関するところまで網羅できる実習を行っていることがまだまだ少ないこと、あるいは教育研究として成果まで至っていないことが考えられた。医中誌において、看護教育としての学習の振り返りとする地域の精神保健の研究では、精神障害者小規模作業所を用いた精神看護実習に関する

検討¹²⁾の1件のみであり、医中誌以外の文献において、精神障害者通所授産施設と小規模通所授産施設の2ヶ所の実習における学びの特徴を比較する研究¹³⁾、および1ヶ所の作業所に2日間参加する実習における学生の学びの研究¹⁵⁾の2つがあり、地域における精神保健福祉に関する看護実習に関する研究成果物はまだまだ少ないことが言える。

研究者の所属大学では、4年次前期において地域における精神看護学実習（以後、精神看護学実習Ⅱとする）を2006年から実施し3年目を迎えている。この実習は、3年次後期の入院患者への看護ケアを学ぶ臨地実習（精神看護学実習Ⅰとする）を終了し、次のステップとして患者が退院後どのような社会資源や地域サービスを受けながら暮らしているのかを医療・保健・福祉の面から実際に学び、看護者の役割を学習する実習となっている。

今回精神看護学実習Ⅱでの実習施設は、3ヶ所の病院の精神科デイケアとNPO法人、社会福祉法人の2ヶ所の社会復帰施設の計5ヶ所のそれぞれ特徴を持つ実習施設に分かれて実習を行ってきた。この実習Ⅱでは地域での精神障害者の継続的な社会生活を支援していくにはどのような看護支援が必要かを捉えるために、学生にとってどのような実習での学びがあったか、また実習施設別の学習発表から各施設の機能と役割や特徴など共有できたことは何かなどについて、学生の最終提出のまとめのレポートから学習内容を分析し、この実習の特徴と意義、効果を検討し、今後の精神看護実習のあり方について検討したので報告する。

Ⅱ. 精神看護学実習Ⅱの概要

1. 単位数と開講日

当大学では、3年次の後期の精神看護学実習Ⅰ（2単位90時間）を既に単位取得し、4年次前期に精神看護学実習Ⅱ（1単位60時間）が実施されている。

2. 実習目的と目標

“地域で生活している精神障害を持つ対象との関わりの中で、対象の理解を深め、医療・保健・福祉サービスの実際を学び、看護の役割を考える”を目的とし、「地域で生活する障害者の生活状況を理解し、施設の役割を学習する」「サービス提供をする医療福祉従事者の役割および他職種との連携を考える」「精神保健に関する社会資源の活用、その他の支援サービスを学習する」「地域精

神保健活動の課題と展望を考える」の4つを実習目標としている。（表1参照）

3. 実習内容

日程と内容は表2に示す。施設での実習は月～水曜日の3日間である。木曜日は学内にてグループワークを行いながら発表資料の作成と準備を行い、金曜日はグループ発表、討議をし、学びの共有を行っている。

4. 指導体制

1グループ18名から20名の学生を5施設に分けて配置し、4人の教員が2組に分かれ、それぞれの施設を担当し指導を行っている。

表1 実習目的と目標

目 的	地域で生活している精神障害を持つ対象との関わりの中で、対象の理解を深め、医療・保健・福祉サービスの実際を学び、看護の役割を考える
実習目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 地域で生活する障害者の生活状況を理解し、施設の役割を学習する <ul style="list-style-type: none"> ・実習施設に通所している対象の生活状況を理解する ・実習施設の概要・役割を理解する ・実習施設で行われている活動や利用者および家族へのケアの方法や留意点について考える 2) サービス提供をする医療福祉従事者の役割および他職種との連携を考える <ul style="list-style-type: none"> ・医療福祉従事者の様々な活動内容とサービスの提供について考える ・医療・保健・福祉の連携に果たす医療従事者の役割について学ぶ 3) 精神保健に関する社会資源の活用、その他の支援サービスを学習する <ul style="list-style-type: none"> ・地域で生活する障害者が活用している様々な社会資源を学ぶ ・導入されている社会資源をケアコーディネーションの視点で考える 4) 地域精神保健活動の課題と展望を考える <ul style="list-style-type: none"> ・地域精神保健活動の目的、法的根拠、意義を利用者の視点から理解する ・医療福祉従事者および施設の機能・役割を理解し、地域精神保健活動の現状と展望について考える

表2 実習日程と内容

曜日	場 所	内 容
月 火 水	実習施設	初日午前：実習目的の明確化、個人目標の設定、施設オリエンテーション以後、実習施設の状況に応じてデイケアへの参加、情報収集、自己学習、日々の振り返りなどを計画的に行う。
木	学 内	グループワーク：地域精神保健活動の機能と役割について資料作成
金	学 内	グループ発表と討議：学びの共有化 最終レポート作成、全記録提出

5. 学習が深められるように学生に特に指導していること

- ・実習の事前学習として、精神保健福祉法、障害者自立支援法、障害者雇用促進法、新障害者プラン、地域精神保健活動、精神障害者の利用できる社会資源（地域精神保健施設、精神科訪問看護）、権利擁護制度などについて学習し、実習初日にレポート提出を課している。
- ・実習期間の記録に関しては、施設の利用者が活用している社会資源について学んだことを、後述の①～③の内容で記入することを特に重要視している。①利用者との会話の中から聞いたり、スタッフから聞いて学んだ実習施設以外のその他の社会資源（様々な社会復帰施設・制度・経済的なサポートなど）について、法的根拠を含めて具体的に記入する②またその資源の利用までの流れ・内容、様々な支援者・連携などの地域支援ネットワークについて学習したことを図示しながら記入する③利用者が、実際に社会資源を利用している時の気持ちや感想を記入する、という3点を出来るだけ達成できるように伝えている。

III. 研究目的

地域精神看護学実習における学生の具体的な学びを明らかにし、学習内容の教育的意義と効果、今後の実習方法について検討をする。

IV. 用語の定義

本研究における「学び」とは、学生自身が実習における体験活動や調べた活動を通し、事象に対して能動的な意味づけや関係づけなどを行った意思行動と定義した。

V. 研究方法

1. 対象

2009年5月から7月に精神看護学実習Ⅱを終了した愛知県立看護大学4年次生80名に対して、研究の趣旨を説明し、研究協力の有無が成績には何ら支障がない事を保証し、参加同意が得られた75名の実習後レポートをデータとした。レポートについては、臨地実習での学びとグループワーク及び発表の中で特に自分が実習していない施設についての学びを含め、新たに理解したこと、深められたことや気づきなどをA4用紙1枚～2枚にまとめ、

実習記録とともに提出している。

2. 分析方法

学生のレポート内容から、地域精神看護学実習の学びとして記述されている内容について精読し、語彙の意味を変えないようにコンテキストデータとして取り出した。さらに個々のデータの共通性を抽出しカテゴリー化した。カテゴリー間の関係を検討し、教育的な意義と今後の実習方法について検討した。また、分析過程においては、3名の研究分担者と検討を繰り返しながら分析結果の厳密性を確保した。

3. 倫理上の配慮

研究参加者には、精神看護学実習Ⅱの終了後に研究の趣旨、プライバシーの保護、自由意志での参加であり、開始後の研究参加の辞退も可能であること、およびデータは全て匿名で処理し、研究以外の目的では使用しないことについて説明した。また、特に実習後レポートの使用については、直接実習成績には反映しないことを説明し、実習評価や成績、学生としての立場が不利にならないように、精神看護学実習Ⅱの成績評価が確定し、教育支援システムに成績を登録した後に、学生に同意書を得た。同意書の回収については、個々に封書を用意し、回収箱を設けて実施した。

本研究は、2009年7月愛知県立大学研究倫理審査委員会の審査を受け承認を得て実施した（看21-05）。

VI. 結果

学生レポートから得られた総コード数は1114件であった。分析した結果学びのカテゴリー（（ ）内はコード件数）として、【医療福祉施設の機能と役割（302）】【障害者のための様々な支援の整備と連携（240）】【病気と闘いながらの地域生活（223）】【多職種による利用者支援（188）】【法制度による利用者支援（85）】【啓発活動の必要性（76）】の6つのカテゴリーが抽出された。（表3参照）

尚、本論文においては、【 】はカテゴリー、《 》をサブカテゴリー「 」をコードとして示す。

1. 医療福祉施設の機能と役割

このカテゴリーでは《デイケア・作業所》では、利用者のニーズや目的に合わせた様々な治療プログラムや訓練

表3 地域精神看護学実習の学生の学び

〔 〕の数値はコード件数

カテゴリー	サブカテゴリー
医療福祉施設の機能と役割	<ul style="list-style-type: none"> ・デイケア・作業所では、利用者のニーズや目的に合わせた様々な治療プログラムや訓練をしている〔101〕 ・デイケア・作業所では、地域での生活リズムや能力を身につけるための支援をしている〔69〕 ・デイケア・作業所ではグループ活動を行い、仲間作り、対人交流をする治療の場である〔54〕 ・それぞれの施設ごとに、職員配置やプログラム内容が異なる〔41〕 ・障害者に合わせた施設の利用が望まれる〔23〕 ・実習施設が多様で、具体的な学びになった〔14〕
障害者のための様々な支援の整備と連携	<ul style="list-style-type: none"> ・短期間であったが、精神障害に関する様々な社会資源を活用する全体がイメージできた〔124〕 ・継続支援のために、医療、保健、福祉、教育なども含めた連携した支援が重要〔44〕 ・社会復帰は必ずしも一律に就労することではなく、様々な利用者のニーズに対応している〔39〕 ・就労支援は、その意義、動機付けをし、自尊心を高めながら社会訓練や活動を行っている〔21〕 ・家族支援のためには、理解と協力を得ながら地域社会全体で支援すること〔7〕 ・就労支援はどの施設でも困難を抱えているため、地域支援がより整備されることが必要〔5〕
病気と闘いながらの地域生活	<ul style="list-style-type: none"> ・病気や生活で困っている内容は様々で、スタッフに相談をしたりアドバイスを受けている〔65〕 ・通所し、プログラム活動を続けながら対人関係や自立訓練をしている〔44〕 ・個々が目標を持って、治療、リハビリを行いながらステップを目指している〔41〕 ・通所し、ふれあひながら意味ある時間を満足以過している〔32〕 ・地域と関わったり、社会資源を利用しながら暮らしている〔22〕 ・臨床実習での患者との比較〔16〕 ・人と関わりながら暮らしていくことが根底的な課題となっている〔13〕
多職種による利用者支援	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な職種がそれぞれの視点をもって利用者ニーズに応えるサービスを提供している〔59〕 ・看護師の役割は、症状を査定し様々な資源や制度、他職種との連携、環境調整を継続する〔56〕 ・地域や施設では、多職種が連携しあって生活支援を行っている〔40〕 ・医療従事者は、将来に向けた利用者や家族の安心した生活を支援する〔14〕 ・様々な医療従事者からの具体的な学び〔12〕 ・医療者は、障害者の自立生活のしづらさや疾患の特徴があることを忘れてはならない〔7〕
法制度による利用者支援	<ul style="list-style-type: none"> ・法律を根拠として、治療や生活維持の為のサービスが提供されている〔41〕 ・様々な法律に基づいた施設、経済的補助や生活に関する社会資源がある〔20〕 ・様々な法と制度は、まだ不十分な状況で、時代と共に何度も改正が重ねられている〔16〕 ・様々な法律や制度には地域差がある〔8〕
啓発活動の必要性	<ul style="list-style-type: none"> ・地域や組織へ積極的に関わることで、障害者や社会資源の知識を普及し、強化していく〔38〕 ・障害者が暮らしやすい地域づくりは、偏見をなくし、自分らしく活動できる社会になること〔16〕 ・問題解決のため、個別のニーズに対応できる資源を選択・活用していくこと〔15〕 ・学生としてできることは、実際の学修を身のまわりの人たちに伝えたり、活動に参加すること〔7〕

をしている〔101〕《デイケア・作業所では、地域での生活リズムや能力を身につけるための支援をしている〔69〕》《デイケア・作業所ではグループ活動を行い、仲間作り、対人交流をする治療の場である〔54〕》《それぞれの施設ごとに、職員配置やプログラム内容が異なる〔41〕》《障害者に合わせた施設の利用が望まれる〔23〕》《実習施設が多様で具体的な学びになった〔14〕》の6つのサブカテゴリーが含まれた。デイケア・小規模作業所の役割、様々な日々の活動プログラム内容などの地域における役割や支援について挙げられた。

2. 障害者のための様々な支援の整備と連携

このカテゴリーでは、《短期間であったが、精神障害に関する様々な社会資源を活用する全体がイメージできた〔124〕》《継続支援のために、医療、保健、福祉、教育なども含めた連携した支援が重要〔44〕》《社会復帰は必ずしも一律に就労することではなく、様々な利用者のニーズに対応している〔39〕》《就労支援は、その意義、動機

付けをし、自尊心を高めながら社会訓練や活動を行っている〔21〕》《家族支援のためには、理解と協力を得ながら地域社会全体で支援すること〔7〕》《就労支援はどの施設でも困難を抱えているため、地域支援がより整備されることが必要〔5〕》の6つのサブカテゴリーが含まれ、様々な利用者のニーズへの対応や継続支援のために、医療・保健・福祉・教育なども含めた連携が重要であること、就労支援では訓練や活動の状況や困難な現況、障害者へのサポートの充実、地域支援の整備が必要であること、家族支援では、地域社会全体で支える必要性が挙げられた。

3. 病気と闘いながらの地域生活

このカテゴリーでは、《病気や生活で困っている内容は様々で、スタッフに相談をしたりアドバイスを受けている〔65〕》《通所し、プログラム活動を続けながら対人関係や自立訓練をしている〔44〕》《個々が目標を持って、治療、リハビリを行いながらステップを目指している

(41)《通所し、ふれあいながら意味ある時間を満足以過している(32)》《地域と関わったり、社会資源を利用しながら暮らしている(22)》《臨床実習での患者との比較(16)》《人と関わりながら暮らしていくことが根底的な課題となっている(13)》の7つのサブカテゴリーが含まれた。学生が施設のプログラムに参加しながら利用者と共に交流体験をし、その実習環境で感じられた空間や時間、ふれあいが必要であること、また会話の中からその施設以外の様々な資源を利用していることを挙げていた。障害者が、目的を持って通所し、病気や生活の困難さに立ち向かい、医療・福祉スタッフのアドバイスを受けながら暮らし続けている、という現状を挙げていた。また、3年次に精神科病院に入院中の患者の看護について学んだ経験から、地域で生活する利用者との交流で、患者との精神情緒状態や生活の仕方が比較できたり、地域生活の中での不安や困ったこと、また充実していることについて考える機会となったことが挙げられた。

4. 多職種による利用者支援

このカテゴリーでは、《様々な職種がそれぞれの視点をもって利用者ニーズに応えるサービスを提供している(59)》《看護師の役割は、症状を査定し様々な資源や制度、他職種との連携し、環境調整を継続する(56)》《地域や施設では、多職種が連携しあって生活支援を行っている(40)》《医療従事者は、将来に向けた利用者や家族の安心した生活を支援する(14)》《様々な医療従事者からの具体的な学び(12)》《医療者は、障害者の自立生活のしづらさや疾患の特徴があることを忘れてはならない(7)》の6つのサブカテゴリーが含まれた。様々な医療職者の存在があり、利用者のニーズに応えた活動を提供していること、また看護師の役割も含め、多職種間での連携によって生活支援を行っていることが挙げられた。

5. 法制度による利用者支援

このカテゴリーでは、《法律を根拠として、治療や生活維持の為にサービスが提供されている(41)》《様々な法律に基づいた施設、経済的補助や生活に関する社会資源がある(20)》《様々な法と制度は、まだ不十分な状況で、時代と共に何度も改正が重ねられている(16)》《様々な法律や制度には地域差がある(8)》の4つのサブカテゴリーが含まれた。治療や生活に関するサービスの提供は、法律や制度に基づいて行われていること、様々な法律によって医療や福祉に関する社会資源があること、また地

域格差や不十分な制度の状況があることやそのために何度も改正が重ねられていることが挙げられた。

6. 啓発活動の必要性

このカテゴリーでは、《地域や組織へ積極的に関わることで、障害者や社会資源の知識を普及し、強化していく(38)》《障害者が暮らしやすい地域づくりは、偏見をなくし、自分らしく活動できる社会になること(16)》《問題解決のため、個別のニーズに対応できる資源を選択・活用していくこと(15)》《学生としてできることは、実際の学修を身のまわりの人たちに伝えたり、活動に参加すること(7)》の4つのサブカテゴリーが含まれた。障害者との交流や指導者とのカンファレンスを通じて、偏見をなくすための社会を築いていくこと、そのためには正しい知識の普及と強化、問題解決への資源活用の促進、暮らしやすい地域づくりに向けた社会活動の必要性が挙げられた。また、実習での学びを精神障害について知らない親や友人に伝えることやボランティアなどの活動参加が学生としてできることとして挙げられた。

VII. 考 察

この実習による学生の学びとして6カテゴリーが抽出された。これらは精神看護実習Ⅱの実習目標に沿って学習内容が深められていることが示されていた。つまり、実習目標の『地域で生活する障害者の生活状況を把握し、施設の役割を学習する』については、【病気と闘いながらの地域生活】、『サービス提供をする医療福祉従事者の役割および他職種との連携を考える』の目標では、【多職種による利用者支援】【医療福祉施設の機能と役割】、『精神保健に関する社会資源の活用、その他の支援サービスを学習する』では、【法制度による利用者支援】【障害者のための様々な支援の整備と連携】、『地域精神保健活動の課題と展望を考える』については、【啓発活動の必要性】といったカテゴリーがそれぞれの目標に繋がっていると考えられた。

今回得られた6つのカテゴリーについて、学生の学びにおける教育的意義と今後の実習方法の検討について考察する。

1. 障害者のための社会資源と地域連携

4年次に実施するこの実習では、3年次に実施した入院患者対象の臨地実習で、退院後の生活支援や地域の社

会資源などの見え難かった点を補うだけでなく、視野を広げる学習となっていた。学生は3年次の病院実習で受け持った患者が退院後、どのような生活をしていくのか想像がつかなかったが、デイケア・作業所などの医療福祉施設で行われている様々な訓練や治療プログラムが個々の障害者の自己実現を目指した活動であることの意味や必要性を学んでいた。また、障害者と共に初めてグループ活動に参加し、実感することによって【医療福祉施設の機能と役割】を具体化できたのではないかと考えられる。そしてその活動体験の中で、退院後の通院を継続し、地域で暮らしている精神障害者と実際にふれあい、会話することによって、利用者が【病気と闘いながらの地域生活】を実現させている現状を学んだ。内山らの研究¹⁴⁾でも「実際に関わることにより、精神障害者のおかれている実情を実感しながらも、社会資源の制約も具体的に捉えながら個々の当事者の課題や中間施設の役割・機能がより明確になってきている」と関わることの意味を述べていることと一致している。また、事前学習として資源や法律に関するレポートを課して実習に臨んでいる。この知識と利用者及び他の医療従事者から得られた話内容を結び付けることによって、体験的な学習で終わらず、実際の学びをより効果的に深めていったのではないかと考える。さらに様々な職種による支援・サービス、生活支援と就労支援、家族支援、そして施設間の連携など精神障害者に対する医療・保健・福祉・教育の社会支援があることを実感していたことが伺われた。これらのことから【多職種による利用者支援】が行われていることへの理解が深められたと考える。

また、《障害者が暮らしやすい地域づくりは、偏見をなくし、自分らしく活動できる社会になること》から精神障害への偏見等の問題が生活に強く影響していることを知り【啓発活動の必要性】を感じていたと考えられる。この実習では精神疾患を抱えた人を“患者”ではなく“障害者”として捉え、そして何よりも障害者を中心に医療のみならず様々な社会資源やサービスが提供され、継続して地域で支援をし続けている事実が確認できたことについては有意義な学びが得られたと思われる。

2. 地域チーム医療と法制度

実習施設では、精神保健福祉士、精神臨床心理士、作業療法士、生活支援員、ジョブコーチ、就労支援員、訪問看護師などからそれぞれの立場や視点から直接指導を受ける機会があった。これらの体験から地域サービスを

行うためには様々な職種が関わりあっていること、そして医療・保健・福祉の職種間が連携し合い継続していくことによって地域支援の強化に繋がっていること、すなわち【多職種による利用者支援】の理解を深め、“地域におけるチーム医療”を学ぶ上では効果的であった。さらに多職種を知ることで、看護師としての独自性、看護の役割をさらに考える良い機会にもなったのではないかと考える。

またこの実習では、精神保健に関する社会資源の活用と法律や制度に基づく支援サービスを広く学ぶことも目標としている。事前学習の中で、精神保健福祉法、障害者自立支援法、障害者雇用促進法などをインターネットや文献でまとめ、実習施設の法的特徴や様々な資源を利用する方々の話の実際を通じて事前学習と連結させ、異なる実習施設間の発表で共有することによって様々な【法制度による利用者支援】についての学習を広げたのではないかと考える。この実習では、医療・福祉サービスの1つ1つの事柄の裏付けとなる法的根拠があることを知る機会となり、看護学生の「法律や制度は苦手だったが、知ることの必要性がわかった」のコードから、法律や制度に対する関心が高まったのではないかと考える。現在、精神保健医療では、精神及び自立支援に関する法律の改正の時期であることから、医療・保健・福祉に関する国の政策や制度の変化にも関心を向けること、そして法制度と社会資源を結びつけて考えることができたのではないかと考える。

3. 今後の実習の方向性

この地域精神看護学実習は、実質3日間の臨地実習を終え、学内の1日目で同じ施設のグループメンバーとのディスカッションおよびパワーポイントの作成準備をし、最終日にグループごとにプレゼンテーションを行い、質疑応答を含めた討論を通じて活発にディスカッションを実施してきた。この結果【医療福祉施設の機能と役割】においては《実習施設が多様で、具体的な学びとなった》、【多職種のよる利用者支援】では《様々な医療従事者からの具体的な学び》となっていた。さらに、「学生発表やディスカッションの中で行けなかった実習施設のことや従事者のことが分かった」というコードなどが見られ、学びが効果的に共有できていったのではないかと考えられる。その理由の1つとしては、4年生で仲間意識も強くなり、これまで積み重ねられてきた実習体験から、グループの中での役割や協力することの大切さを意識でき

ていたことが、効果的なプレゼンテーションにつながっていたと考える。学生は1施設での短期間の実習経験であったが、実習していない施設の機能と役割の特徴を知らながら、実習体験を共有したことにより、地域で生活する精神障害者のニーズに合わせた幅広い支援が学べたことが示唆された。

実習方法においても、臨地実習3日間、グループワーク2日間の過密日程ではあるが、今回抽出された6カテゴリーから、学生が学びを深める効果的な実習であり、地域精神看護実習の到達目標はほぼ達成していると考え、今後もこのスタイルで実習を進めていきたいと考える。そして、特に先に述べた考察の〈1. 障害者のための社会資源と地域連携〉、〈2. 地域チーム医療と法制度〉についての学習が続けられるために、学生の〈3. 学内グループ発表における学びの共有〉がより得られるように、これまで通り実習施設との連携や学内の教員間の連携も含め実習環境を整えていくことも検討を続けていく必要がある。

今後教育者として考えることは、精神障害者における様々な精神保健医療福祉に関する法制度の変化に柔軟に対応し、学生が障害者のための退院支援や地域での社会生活支援の視野を広げられるように学べることである。そのためには、教育実習を行う事前準備として、精神看護概論、方法論の授業でさらに新しい変化に対して教授できるように、また地域看護学や社会福祉などの他領域と連携し、教育方法の検討をする必要があると考える。そして《学生としてできることは、実際の学習を身のまわりの人たちに伝えたり、活動に参加すること》と発言できる学生が一人でも多く出てくるような教育を行っていきたいと考える。

VIII. まとめ

1. 6カテゴリーは、精神看護学実習Ⅱの実習目標に沿って学習内容が深められていることが示されていた。
2. 入院患者対象の3年次臨地実習で、退院後の暮らしや社会資源などの見え難かった点を補うだけでなく、地域で生活する障害者の生活状況などの医療・保健・福祉の視野を広げる実習であった。
3. 医療者以外の福祉従事者の役割や精神保健に関する社会資源の活用と法律や制度に基づく支援サービス、地域チーム医療について学びが深められた。
4. グループ発表やディスカッションや討論を通じ、幅広い学びを共有し短期ではあるが有効な実習であることが示唆された。
5. 今後教育者として考えることは、精神障害者における様々な精神保健医療福祉に関する法制度の変化に柔軟に対応し、学生が障害者のための退院支援や地域での社会生活支援の視野を広げられるように指導することである。

IX. 謝 辞

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました看護学生の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

文 献

- 1) 加藤知可子, 水馬朋子: 精神看護実習における精神障害者への看護学生の社会的態度に関する検討. 日本医学看護学教育学会誌, 17: 238-240, 2008.
- 2) 安永薫梨, 松枝美智子, 安田妙子, 中津川順子, 村島さい子, 中野榮子, 安酸史子: 経験型精神看護実習におけるチームティーチング体制の検討 実習前後に行った事例検討会の成果について. 日本看護学会論文集 看護教育, 37: 96-98, 2006.
- 3) 齋二美子, 石田真知子: 精神看護実習における看護学生の精神障害者及び精神科看護に対する意識の変化と学びの関連. 東北大学医学部保健学科紀要, 15(1): 43-56, 2006.
- 4) 加藤知可子: 精神看護実習における看護学生の精神障害者への社会的態度. 日本看護学会論文集 看護教育, 37: 162-164, 2008.
- 5) 石田真知子, 柏倉栄子, 杉山敏子, 渡邊生恵: 精神看護実習における学生-患者間の対人距離の変化. 東北大学医学部保健学科紀要, 13(2): 157-164, 2004.
- 6) 入江拓: 精神看護実習における患者との体験が看護大学生の保護室に対する受けとめに及ぼす影響 テキストマイニングによる探索的分析. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 16: 47-57, 2008.
- 7) 入江拓, 小平朋江: 看護大学生の精神科保護室に対する受け止めおよび視点の変化 テキストマイニングによる非構造型データの分析から. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 15: 1-10, 2007.
- 8) 篠崎まゆみ, 白川洋子, 金城祥教: 精神看護の実習

- 到達評価表を用いた学生の自己評価からの分析 スタッフ参画協働の手法で作成した到達評価表を用いて. 日本看護学会論文集 看護教育, 38: 222-224, 2007.
- 9) 滝下幸栄, 山田京子, 北島謙吾: 精神看護実習における「患者-看護者関係」に関する学習内容の評価. 京都府立医科大学看護学科紀要, 14: 21-28, 2005.
- 10) 入江拓, 石野麗子, 松本浩幸: 精神看護実習における看護大学生の対象理解の視点の置き方および情報判別の傾向に関する考察 構造判別図81事例の分析から. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, 14: 1-12, 2006.
- 11) 加藤知可子: 精神看護実習での心理療法士参加によるカンファレンスの導入に関する検討 プロセスレコードを活用して. 日本看護学会抄録集 看護教育, 36: 87, 2005.
- 12) 加藤知可子: 精神障害者小規模作業所を用いた精神看護実習に関する検討. 日本看護学会論文集 精神看護, 39: 188-190, 2007.
- 13) 橋本顕子, 山田京子, 北島謙吾: 精神障害者通所授産施設・小規模通所授産施設の実習における学びの特徴—レポート分析から— . 日本看護研究学会雑誌, 31-3: 330, 2008.
- 14) 内山繁樹, 西典子, 飯島伸子: 精神障害者地域作業所における参加型実習の学び. 日本看護研究雑誌, 30-3: 166, 2008.